

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02052

研究課題名（和文）離散民の祖国志向の歴史・社会的構築性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Historical and Social Constructiveness of Diasporic Nationalism

研究代表者

金 友子（KIM, Wooja）

立命館大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20516421

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後間もなく設立された在日韓国人学生の団体「在日韓国学生同盟」を研究対象として、この団体の1960～70年代の活動に着目し、日本に居住する在日韓国人・朝鮮人の「祖国」志向的な思想と行動を把握し、彼ら・彼女らの活動がどのように組織され、また、民族や祖国なるものが個人にどのように受け止められていったのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本におけるエスニックマイノリティのうち歴史的に高い比重を占めてきた在日朝鮮人のなかでも、二世という世代の実像を、特定の団体に参加していた個人の歴史と実践という観点から立体的に明らかにし、研究蓄積が比較的薄い60～70年代の在日朝鮮人（史）研究の欠落を埋めることに寄与した。また、彼ら・彼女らの祖国志向は歴史的・社会的に構築されたものであり、所与のものとは看做されないことを示した。インタビューを通して、社会的マイノリティ集団におけるピアサポートの重要性が確認された。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the activism of Koreans living in Japan toward the homeland and demonstrated how the "ethnicity" and "homeland" were perceived by individuals in 1960-70. By paying attention to the period of the transition to the "second generation," it uncovered the complexity of the second generation, which cannot be discussed only by "settlement orientation."

研究分野：社会学

キーワード：在日朝鮮人 在日韓国人 祖国志向 ナショナリズム 離散 ディアスポラ 二世

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景は三つに分けられる。(1)在日韓国人・朝鮮人の生活や運動についての実証的研究で主に資料発掘を中心としてきた歴史学、(2)それらの人々の自己意識を分析してきたアイデンティティ研究やエスニシティ研究、ナショナリズム研究などの社会学的研究、(3)海外コリアンの中に在日韓国人・朝鮮人を位置づけて朝鮮半島からの流出の動きと居住地での生活・運動などを記述・考察するディアスポラ研究である。

(1)および(2)は、在日韓国人・朝鮮人が生み出された歴史的背景、日本社会での生活実態や活動を明らかにしてきた。また、(2)および(3)は、在日朝鮮人の民族性のありようを分析し、とりわけそのアイデンティティの柔軟性・構築性を、国民国家を越える新たなアイデンティティの可能性として提示してきた。

しかし、上記(1)のとりわけ1945年以降については、1950年代の民族運動、60年代の朝鮮民主主義人民共和国への帰国運動、70年代以降の日本社会での権益獲得・擁護運動についての研究蓄積はあるが、申請者が対象とする団体ないし学生団体が展開していた運動についてはほとんど研究がない。また、上記(2)と(3)の先行研究は、祖国志向と在日志向を二項対立的に捉え、祖国志向を所与のものとして見做している点で、在日朝鮮人の自己意識の形成を捉え損ねている。(3)に関連して、在日朝鮮人の歴史的背景から、自発的移動を連想させる「移民」として在日朝鮮人を語ることは忌避されがちで、これまで特に英語圏で多くの蓄積のある移民研究の蓄積が反映されていない。そのため、居住国に生まれ育った在日朝鮮人(2世以降の世代)の思想と行動は、十分に捉えられてきたとは言い難い。

以上の背景から、本研究は具体的な運動に参加していた団体・個人を対象に、祖国志向とは何かを明らかにしようとするに至った。

2. 研究の目的

本研究は、「在日韓国人・朝鮮人二世にとって祖国とは何か」を明らかにすることを学術的な問いとして設定し、何が彼らを「祖国」に向かわせたのかという問いのもとに、60年代の日本社会と朝鮮半島の二つの「国家」で、韓国にコミットした在日韓国人学生にとっての「現実」を照射し、祖国とは、民族とは、日本で生きているということは、何を意味していたのかを明らかにすることを目的とした。具体的には以下の二つである。

第一の目的は、二世の実像を、対象団体発刊の文書資料を横軸にし、団体という空間を縦軸とし、インタビュー調査による個々人の経験という奥行きを合わせて、立体的に描くことで、研究蓄積の薄い60~70年代の在日朝鮮人(史)研究の欠落を埋めていくことである。

第二の目的は、既存の研究が「祖国志向」に与えてきたイメージを膨らまし、覆すことである。これを通して、二世の複雑さを具体的に明らかにすることができる。

3. 研究の方法

本研究には三つの手法を用いた。

第一に、インタビュー調査で個々人の経験を明らかにした。対象者の活動地域の多様性は担保できたものの(東京、大阪、兵庫、愛知)、新型コロナウイルスの流行によって対面でのインタビューが困難になり、目標値の20~30名には届かなかった。インタビューからは、組織化の過程や活動の内容、活動に参加する前後の意識の変化などが明らかになった。また、活動に参加する大きな誘因となったのは、同じ状況に置かれている仲間/ロールモデルの存在であったこと、他団体との関係もある程度明らかになった。

第二に、資料収集である。インタビュー対象者や関係者から資料を提供していただき、新たな資料発掘に繋がった。

第三に、理論研究である。とりわけディアスポラ研究、移民二世論を中心に理論の適用可能性を探り、接続を試みた。また、インタビューの中で表明された、日本で感じる疎外感や差別的な視線、鬱屈した感情を解き明かすために、現代的人種主義の理論を検討した。

4. 研究成果

インタビュー調査について、2018年度に5名、その後新型コロナウイルスの流行をはさんで2021年にインタビューを再開し、1名のインタビューを行った。以降、2022年に2名、2023年

に2名のインタビューを実施した。このほか、他の研究グループの個別/グループインタビューに同行した。おこなったインタビューを全て文字おこした。

これらのインタビューからは、日韓条約締結前後の運動について、また、国籍に対する捉え方と学生という社会的地位について、また、70年代前半から半ばにかけての組織内部の雰囲気、人間関係、他団体との関係などが明らかになった。また、参加および活動継続の動機が多様性が浮き彫りになった。とりわけ人間関係(構成員の人的魅力)が大きな影響を与えていたことが伺えた点は、「民族」や「祖国」に回収されない観点の必要性を提起する。

インタビュー内容を、対象となる民族団体との出会い、日本名・民族名の使用、韓国往来の経験、留学生の存在、日本で生きていくことの難しさと疎外感といったテーマに分類して分析を加えた。これを「1960年代の在日韓国人学生運動と「祖国」の位置：当事者インタビューを中心に」としてまとめて発表した(2019年8月)。

そのほか2件の研究報告を行なった。一つは日韓条約を前後しての韓国国籍取得に関する議論を整理し、発表した(2022年12月)。研究対象とする学生団体では、在留資格や法的地位についての議論はなされていたものの国籍を直接的に論じたり、国籍に関して主張するということが少なかったことが明らかになった。後に行ったインタビューで、その原因の一端を知ることができた。もう一つは、資料とインタビューとのギャップについて考察するもので、結論を披露するというよりは、アプローチの方法を考察し、研究上の悩みを共有するものであった(2023年2月)。研究の世界史的位置づけについて重要な指摘を得ることができた。

類似の対象を扱う他の研究グループのインタビュー(個人およびグループインタビュー)に同行し、70年代の在日韓国人学生運動、対象団体の状況、団体への思い、活動の中での自己の変化、他団体との関わりについての話を聞くことができた。

次に、資料収集について。インタビュー時に対象者から写真や文書等数点の資料を提供してもらった。これらはデータベースを作成し、デジタル化した。(ただし、多くの個人情報が掲載されているため未公開である。)資料の精読を進め、対象となる団体の活動記録を年表化した。

資料調査をもとに、1960年代の日韓条約反対闘争についての論文を執筆した。日本で生まれた在日朝鮮人二世の世代は、祖国の民主化運動への連帯とともに、日本に居住しているという「特殊性」から、居住国での権利擁護・伸長という課題も抱えていた。とりわけ二世以降の若者にとって、日韓条約で案として挙がっていた在留資格は不安定であり、未来を左右する事案であった。この問題に対して対象団体は、1963年頃から法的地位に関する学習を始め、64年以降、民団や青年団体とともに永住権を求めて「法的地位要求貫徹運動」を展開していった。

最後に、理論研究について。関連する諸分野の文献を精読した。ディアスポラ論についての文献研究では、ディアスポラ概念の起源とその用法の変遷に関する先行研究を追った。宗教的意味付けが強かった時代から、世俗化を経て人間(民族集団)の移動を指す用語に転化するに至るまで、歴史的負荷の強い用語であることを再確認できた。

社会運動論関連の文献からは、相対的剥奪論、集合行動論、資源動員論、フレーム理論、新しい社会運動論、グローバルシックスティーズ論(the global sixties)など、どれも本研究に関連はするものの、問題意識には若干の距離があり、導入するにあたっての在日朝鮮人の歴史的背景、社会的位置、メンバーシップのあり方と当人たちが認識する(変革の対象となる)社会等、固有の問題を吟味した。

マイノリティ集団に属する個人に与える差別の影響を探るため、現代的人種主義および複合的な差別について関連の文献を調査した。前者については、マイクロアグレッションに関する本を翻訳し出版した。マイクロアグレッションがもたらす委縮効果が、当時の古典的人種主義の影響と相俟って青年期の在日朝鮮人の(民族)意識の基層を成しているであろうこと、後者については、とりわけ女性メンバーの存在と活動への参加の仕方、あるいは不在を考える際に重要な視点を得た。また、現代的人種主義および複合的な差別について関連の文献を調査し、マイノリティ集団に属する個人に与える差別の影響を探った。また、他の調査プロジェクト(在日朝鮮人女性の生きづらさについての調査)から、差別の個別的な経験について重要な知見を得た。

以上のように、本研究は新型コロナウイルスによって最も重要視していたインタビューに制約がありはしたものの、在日朝鮮人二世の祖国志向の実像を脱本質化しつつ解明するのに必要なデータを収集し、それらを関連領域の理論研究につなげていく知見を得ることができた。第一に、1960年代の在日朝鮮人学生が直面していた有形無形の差別とそれの中でのアイデンティティ形成プロセスである。第二に、韓国を自らの「祖国」として位置付ける際に具体的な経験やリソースがあったことである。第三に、日常活動や対外行動などの活動の実態をかなりの程度把握することができた。これらを総じて、対象団体の運動史と合わせて60~70年代の在日朝鮮人の歴史を立体的に記述し、「在日韓国人・朝鮮人二世にとって祖国とは何か」という問いの答えに近づくことができたといえる。インタビューに関しては、実現には至らなかったが複数の関係者を紹介してもらったので、今後もさらに継続して実施し、二世の60-70年代史としてまとめ上げていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 金友子	4. 巻 191
2. 論文標題 在日朝鮮人女性に対する日常的で微妙な差別	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東方學志	6. 最初と最後の頁 87-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金友子	4. 巻 179
2. 論文標題 本の紹介『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひょうご部落解放	6. 最初と最後の頁 96-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金友子, kimura byoi	4. 巻 11
2. 論文標題 解題「移動の経験 アートを通してジェンダーと人種のアイデンティティをクィアする」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 抗路	6. 最初と最後の頁 178-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金友子	4. 巻 30
2. 論文標題 立命館大学「チョン語」問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 政策科学	6. 最初と最後の頁 67～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/0002000035	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 金友子
2. 発表標題 在日コリアン2世の民族・学生運動の軌跡：「在日韓国学生同盟」小史
3. 学会等名 朝鮮族研究学会・北東アジア学会（関西地域研究会）合同研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金友子
2. 発表標題 60年代韓日協定前後の韓国国籍 / 朝鮮籍をめぐる論争と現在
3. 学会等名 2022統一人文学世界フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Wooja KIM
2. 発表標題 Experiences of the Zainichi Women: The Human Rights Situation of Ethnic Korean Residents Living in Japan
3. 学会等名 2022 Online Social Justice Symposium (Chi Sigma Iota Omega Mu Gamma Chapter, Antioch University Seattle, Clinical Mental Health Program) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金友子
2. 発表標題 実態調査に見る在日朝鮮人女性の生：コロナ禍と複合差別
3. 学会等名 2022年第二回国際シンポジウム 日本の文化権力とサバルタン：女性・芸人・囚人（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Wooja KIM
2. 発表標題 Implications for translating Microaggressions in Everyday Life for Japanese society
3. 学会等名 The 41st IGC-SSRI Joint International symposium "Understanding Microaggressions in the Japanese Context: Implications and Interventions for Social Change" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金友子
2. 発表標題 在日朝鮮人のジェンダー的差別経験と問題設定
3. 学会等名 2020統一人文世界フォーラム(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金友子
2. 発表標題 在日朝鮮人女性への微細な攻撃
3. 学会等名 第27回延世大学国学研究院比較社会研究所コロキウム「『ディアスポラ』の非対称性 テレサ・ハッキョン・チャの美学と在日朝鮮人女性の言葉」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KIM Wooja
2. 発表標題 1960年代の在日韓国人学生運動と「祖国」の位置: 当事者インタビューを中心に
3. 学会等名 The 14th ISKS International Conference of Korean Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 明戸隆浩、安部彰、伊藤昌亮、遠藤正敬、兼子歩、金友子、清原悠、小林・ハッサル・柔子、五味渕典嗣、澤佳成、隅田聡一郎、高史明、竹田恵子、堀田義太郎、松本卓也、間庭大祐、百木漠、山崎望、山本興正、山本浩貴、梁英聖	4. 発行年 2021年
2. 出版社 共和国	5. 総ページ数 435
3. 書名 『レイシズムを考える』（清原悠編）	

1. 著者名 デラルド・ウィン・スー著、マイクロアグレッション研究会訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 492
3. 書名 日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション ー人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別	

1. 著者名 Myungkoo Kang, Marie-Orange Rive-Lasan, Wooja Kim, Philippa Hall eds.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 194
3. 書名 Hate Speech in Asia and Europe: Beyond Hate and Fear	

1. 著者名 社会思想史学会（金友子）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 社会思想史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------